

研究ノート

韓国高齢者の介護における息子の嫁の 介護ストレス認知とQOLの関係

張英恩¹⁾・嚴基郁²⁾・金貞淑³⁾・尹靖水⁴⁾・中嶋和夫⁵⁾

- I. 緒言
- II. 研究方法
- III. 結果
 - 1. 集計対象者の属性分布
 - 2. 介護肯定感の回答傾向
 - 3. 介護否定感の回答傾向
 - 4. 健康関連 QOL の回答傾向
 - 5. 介護評価と健康関連 QOL の関係
- IV. 考察

キーワード：高齢者介護、介護ストレス、
介護肯定感、介護否定感、QOL

- 1) 岡山県立大学大学院保健福祉学研究科
- 2) 群山大学校行政福祉学部副教授
- 3) 同志社大学社会福祉教育・研究支援センター
- 4) 梅花女子大学現代人間学部教授
- 5) 岡山県立大学保健福祉学部教授

I. 緒言

韓国は、世界に類がない急速な高齢化の中で、要介護高齢者や認知症 dementia の有病率が相次いで報告⁽¹⁾され、その事実を受けて韓国政府は、2008年度から老人長期療養保険法をスタートさせている。しかし、高齢者の大半は、利用制限が厳しいことからその恩恵を受けることなく、家族介護を継続せざるを得ない状況に置かれている。従来の研究成果⁽²⁾に基づくなら、高齢者介護は家族員に身体的、精神的に大きな影響を与えるという仮説は多くの支持を得ている。この仮説に関連した研究は韓国でもこれまで認められる⁽³⁾が、家族介護者の介護に伴うストレス認知と精神的健康の関連性を、可能な限り誤差変数を取り除いた構造方程式モデリングで解析しておくことは、今後の高齢者家族に対するサービスの提供ならびにその効果を明らかにする上で重要な課題と言えよう。また、最近の高齢者介護に伴うストレス評価研究⁽⁴⁾においては、高齢者の家族介護は

(1) 김윤정・최혜경, 1993 : 63-83, 문혜리, 1992 : 108-132, 박영남・ほか, 1991 : 1121-1129, 서국희・ほか, 2000 : 809-824, 우종인・ほか, 1997 : 92-102, 조맹제・함봉진, 1997 : 306-322, DY Lee・ほか, 2002 : 1233-1299, JI Woo・ほか, 1998 : 983-987
(2) 김윤정・최혜경, 1993 : 63-83, 마정수・김초강, 1995 : 83-110, 문혜리, 1992 : 108-132, 유광수, 2001 : 125-147, 이경자, 1995 : 30-51, 이미진・이가옥, 2000 : 215-228, 이영호・ほか, 1998 : 1292-1305, 이은희, 1998 : 211-239, Grafstrom et al., 1992 : 861-870, Baumgarten, 1989 : 1137-1148, Baumgarten et al., 1992 : 61-70, Baumgarten et al., 1994 : 126-132, Haley et al., 1987 : 405-411, Jutras and Lavoie, 1995

: 46-73, Nygaard, 1988 : 33-37, Shin, 1997 : 195-211, Vitaliano et al., 1991 : 392-402

(3) 김수영, 2003 : 77-105, 김수영・김진선・윤현숙, 2004 : 111-128, 윤현숙・차홍봉・조양순, 2000 : 137-153, 이강오, 2003 : 15-26, 이은희, 2004 : 231-251

(4) Cohen et al., 1994 : 378-391, 齊藤恵美子・國崎ちはる・金川克子, 2001 : 180-189, 井上郁, 1996 : 189-202, 山本則子・ほか, 2002 : 660-671, 櫻井成美, 1999 : 203-210, 博野信次・小林広子・森悦朗, 1998 : 561-567, Orbell and Hopkins and Gillies, 1993 : 149-163, Pruchno, 1990 : 57-71, Schulz et al., 1995 : 771-791, 右田周平・服部ユカリ, 2001 : 129-137

負担といった否定的な側面のみから評価されるべきでなく、介護者に喜びや満足感をもたらしたり、介護者自身の人間的成長や高齢者との良好な人間関係をもたらすといった肯定的側面も見逃すべきではないことを指摘している。しかし、韓国の高齢者の介護に関連したストレス評価研究において、介護肯定感と介護否定感の双方に着目した研究はほとんど見あたらない。

そこで本研究は、在宅要介護高齢者の家族介護者のうち、家族介護者として最も頻度が高い息子の嫁に着目して、その社会的支援のあり方について検討することをねらいとして、彼女らの介護ストレス評価（介護肯定感と介護否定感）がQOLに与える影響を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

調査は、要介護高齢者を介護する主たる家族員を700人（順天：A道A市500世帯；回収313世帯と天安：B道B市200世帯；回収129世帯）を対象に実施した。対象選定においては老人福祉館を利用している高齢者の主たる家族介護者に対し、福祉専門職員（ソーシャル・ワーカー）が調査協力の有無を事前に確認し、同意が得られた者のみを対象とした。調査は留置法で実施した。調査員は、調査票を家族介護者に個別に配布し、ほぼ2週間後に、秘密保持のため厳封された調査票を回収した。

調査内容は、家族介護者の性、年齢、介護に対する肯定感と否定感、QOL、ならびに要介護者高齢者の性、年齢で構成した。

介護肯定感は、櫻井（櫻井成美，1999：203-210）が開発した「肯定感測定尺度」を構成する3つの因子のうち、「介護状況の満足感」を構成している8項目に着目し測定した。いずれの項目も「要介護者の介護に関して、あなたの気持ちについておたずねします。」に対する回

答となっている。回答は4件法で、「0点：全くそう思わない」「1点：あまりそう思わない」「2点：ややそう思う」「3点：非常にそう思う」となっている。

介護否定感は、東野他が開発した「介護負担感指標」（Higashino, 2003：1-14）で測定した。それは「社会活動に関する制限感」「要介護高齢者に対する拒否感情」「経済的逼迫感」の3領域、計12項目で構成されている。いずれの項目も「現在行っているあなたの介護に対する負担感についておたずねします。」とし、回答は3件法（「0点：まったくない」「1点：ときどきある」「2点：しばしばある」）で回答が求められている。

QOLは、健康関連QOLを測定する「SI-HRQOL-15」（中嶋和夫・香川幸次郎・朴千萬，2003：8-15）で測定した。これは、地域住民の快適で利便性の高い生活圏において健康に生活することを重視し、「健康と生活圏の質に対する満足感」を測定する尺度で、下位概念（因子あるいは潜在変数）が、生活圏に関連した「環境快適因子」と「環境利便因子」、及び健康に関連した「身体的因子」、「心理的因子」、「社会関係因子」の計5因子から構成されている。それぞれの因子には観測変数が3項目づつ配置され、回答はすべての項目に対して3件法（「0点：いいえ」、「1点：どちらでもない」「2点：はい」）で求める形式となっている。

前記測定尺度の日本語から韓国語への翻訳作業は、Brislinら（Brislin, 1970：185-216）が提唱している方法を参考に進めた。まず日本語原版を韓国語に日本在住の韓国人研究者が翻訳し、次いでその翻訳をもとに日本語へのback translationを行い、韓国語版を完成させた。このときのback translationは、翻訳者とは別のバイリンガルの者（日本留学の経験がある韓国在住の大学教員1人、現在日本の大学院博士課程に在籍する韓国人大学院生1人）が

行った。

統計解析にあたっては、介護肯定感と介護否定感がQOLに影響すると同時に、介護肯定感は介護否定感を和らげると仮定した因果モデルを構築し、このモデルのデータへの適合度ならびに要素間の関連性について検討した。この因果関係の解析に先立ち、それぞれの尺度の因子構造モデルのデータへの適合性と信頼性について検討した。以上の解析には、統計ソフト「SPSS11.5J for Windows」ならびに「AMOS version 5」を使用した。前記因果モデルの適合度は、説明力の指標として、CFI及び、RMSEAを採用した。CFIは一般的に0.9以上、RMSEAは0.08以下であれば、そのモデルがデータをよく説明していると判断される。なお、パス係数の有意性は、検定統計量で判断し、その絶対値が1.96以上（有意水準5%）を示したものを統計学的に有意とした。

本研究では、回収された442人の調査票のうち、集計対象を要介護高齢者との続柄が息子の嫁となっており、かつ彼らの年齢、介護に対する肯定感と否定感、QOL、ならびに要介護者高齢者の性・年齢に欠損を有さない172人を集計対象とした。

Ⅲ. 結果

1. 集計対象者の属性分布

介護者、要介護高齢者の属性は表1に示した。集計対象172名における主介護者である息子の嫁の年齢は、平均が45.1歳（標準偏差7.6）、範囲26～67歳であった。要介護高齢者の性別は、男性48名、女性124名であり、年齢は、平均が76.1歳（標準偏差6.5）、範囲65～99歳であった。

2. 介護肯定感の回答傾向

介護肯定感の回答分布は表1に示した。因

子構造モデルのデータへの適合性はCFIが0.927、RMSEAが0.139、クロンバックの α 信頼性係数は0.922であった。介護肯定感に関する尺度（「介護状況の満足感」）の得点は、平均が11.15点（標準偏差5.3）、範囲0～24点であった。「非常にそう思う」「ややそう思う」の2回答に着目すると、最も頻度の高い項目は、「要介護者が何か小さなことに喜ぶのを見て、嬉しくなる」31名（18.0%）、94名（54.7%）、計125名（72.2%）であり、次いで「要介護者が世話に感謝したり、喜んでいると感じる」28名（16.3%）、82名（47.7%）、計110名（64.0%）「世話をすることで、要介護者と親密になったように感じる」22名（12.8%）、67名（39.0%）、計89名（51.8%）、であった。

3. 介護否定感の回答傾向

介護否定感に関する因子構造モデルのデータへの適合性はCFIが0.945、RMSEAが0.088、クロンバックの α 信頼性係数は0.927であった。介護否定感についての回答分布は表2に示した。介護負担感尺度についての各因子得点は、「社会活動に関する制限感」が、平均が3.8点（標準偏差2.3）、範囲0～8点であった。「要介護高齢者に対する拒否感情」については、平均が3.1点（標準偏差2.1）、範囲0～8点であった。「経済的逼迫感」については、平均が3.5点（標準偏差2.5）、範囲0～8点であった。なお、介護否定感の総合得点は、平均が10.4点（標準偏差6.1）、範囲0～24点であった。

4. 健康関連QOLの回答傾向

健康関連QOLの因子構造モデルのデータへの適合性はCFIが0.867、RMSEAが0.102、クロンバックの α 信頼性係数は0.900であった。介護者の健康関連QOLの回答分布は表3に示した。QOLの得点は、平均が19.8点（標準偏差6.9）、範囲2～30点であった。

表 1. 介護肯定感（8 項目）の回答傾向（n = 172）

質問項目	回答カテゴリ			
	全く そう思わない	あまり そう思わない	やや そう思う	非常に そう思う
介護状況の満足感				
Xa1. 要介護者の世話を義務感からではなく、望んでしている	31 (18.0 %)	69 (40.1 %)	59 (34.3 %)	13 (7.6 %)
Xa2. 要介護者といるのが楽しいと感じる	29 (16.9 %)	96 (55.8 %)	39 (22.7 %)	8 (4.7 %)
Xa3. 要介護者の世話をするのが、自分の生きがいになっている	36 (20.9 %)	88 (51.2 %)	42 (24.4 %)	6 (3.5 %)
Xa4. 要介護者の世話をすることによって、満足感がえられる	37 (21.5 %)	83 (48.3 %)	43 (25.0 %)	9 (5.2 %)
Xa5. 世話をすることで、要介護者と親密になったように感じる	23 (13.4 %)	60 (34.9 %)	67 (39.0 %)	22 (12.8 %)
Xa6. 要介護者が何か小さなことに喜ぶのを見て、嬉しくなる	13 (7.6 %)	34 (19.8 %)	94 (54.7 %)	31 (18.0 %)
Xa7. 要介護者の世話をしている、逆に自分が元気づけられたり、励まされたりする	26 (15.1 %)	67 (39.0 %)	60 (34.9 %)	19 (11.0 %)
Xa8. 要介護者が世話に感謝したり、喜んでいと感じる	21 (12.2 %)	41 (23.8 %)	82 (47.7 %)	28 (16.3 %)

単位:名(%)

表 2. 介護否定感（12 項目）の回答傾向（n = 172）

質問項目	回答カテゴリ		
	まったく ない	ときどき ある	しばしば ある
社会活動に関する制限感			
Xb1. 介護のために、趣味や学習などの個人的な活動に支障をきたしている	31 (18.0 %)	87 (50.6 %)	54 (31.4 %)
Xb2. 介護のために、社会的な役割が果たせず、不安になる	56 (32.6 %)	89 (51.7 %)	27 (15.7 %)
Xb3. 介護に追われ、家族や親族との関係がだんだん疎遠になると感じる	69 (40.1 %)	76 (44.2 %)	27 (15.7 %)
Xb4. 介護のために、自分自身のための自由な時間がとれない	33 (19.2 %)	90 (52.3 %)	49 (28.5 %)
要介護者に対する拒否感情			
Xb5. 適切に介護しているにもかかわらず、要介護者から感謝されていないと感じ	54 (31.4 %)	92 (53.5 %)	26 (15.1 %)
Xb6. 要介護者を見るだけでイライラする	61 (35.5 %)	94 (54.7 %)	17 (9.9 %)
Xb7. 要介護者に対して、我を忘れてしまうほど頭に血がのぼるときがある	79 (45.9 %)	73 (42.4 %)	20 (11.6 %)
Xb8. 要介護者の言動に、どうしても理解に苦しむときがある	47 (27.3 %)	103 (59.9 %)	22 (12.8 %)
経済的逼迫感			
Xb9. 介護に必要な費用が家計を圧迫していると感じる	41 (23.8 %)	98 (57.0 %)	33 (19.2 %)
Xb10. 介護に関わる出費のために、余裕のある生活ができなくなったと感じる	59 (34.3 %)	73 (42.4 %)	40 (23.3 %)
Xb11. 要介護者の介護には費用がゆかゆすぎると感じる	52 (30.2 %)	82 (47.7 %)	38 (22.1 %)
Xb12. 介護のために、貯蓄していたお金までも使い、将来の生活に不安を感じる	69 (40.1 %)	79 (45.9 %)	24 (14.0 %)

単位:名(%)

5. 介護評価と健康関連 QOL の関係

介護肯定感と介護否定感が QOL にどのような影響を持っているかを明らかにすることをねらいとして、介護肯定感（「介護状況の満足感」）と介護否定感（「介護負担感」）を独立変数、QOL を従属変数とし、介護肯定感と介護否定感にそれぞれ QOL に直接影響を与えると同時に、介護否定感に影響を与え、介護否定感がさらに QOL へ影響を与えるとするモデルを設定し、そのデータへの適合度を検討した。

その結果、モデルのデータへの適合度は CFI が 0.886、RMSEA が 0.065 で、検定統計量においては、介護負担感から QOL へのパス係数

以外のすべてのパス係数の絶対値で、有意水準 5% を意味する 1.96 以上となっていた。なお、このときの介護状況の満足感と介護負担感から QOL への寄与率は 52.8%、介護状況の満足感から介護負担感への寄与率は 39.3% であった。

IV. 考察

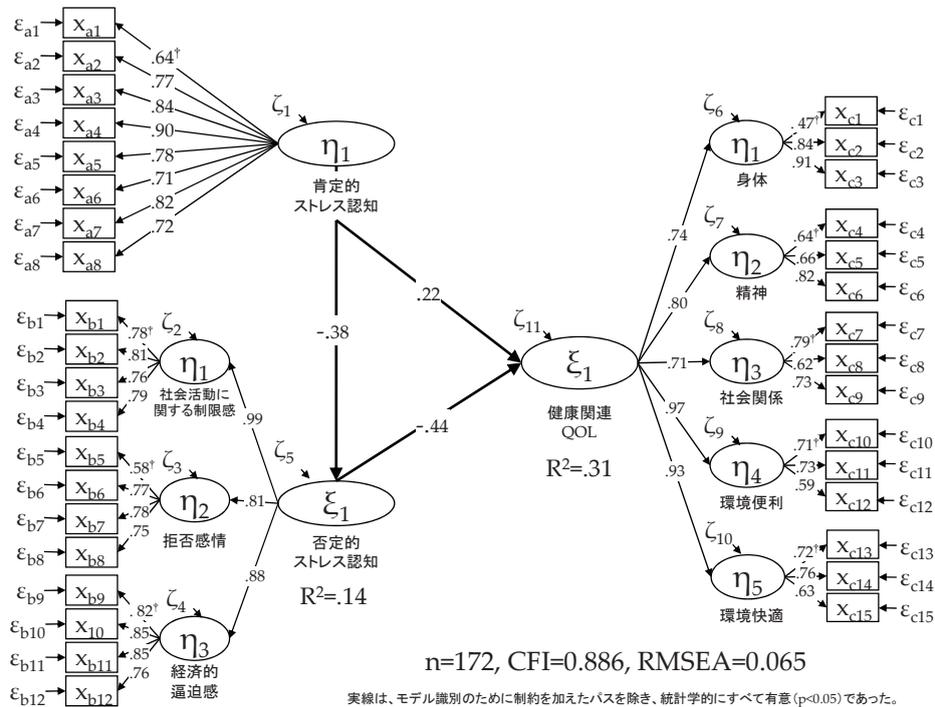
本研究は、在宅高齢者の家族介護者のうち、家族介護者において最も頻度の高い息子の嫁に着目し、彼女らの介護ストレス評価（介護肯定感と介護否定感）が QOL に与える影響を明らかにすることを目的に行なった。本研究では、

表 3. 健康関連 QOL (15 項目) の回答傾向 (n = 172)

質問項目	回答カテゴリ		
	いいえ	どちらでもない	はい
身体的因子			
Xc1. 自分の体の調子に満足していますか	39 (22.7 %)	63 (36.6 %)	70 (40.7 %)
Xc2. 自分の体力に満足していますか	45 (26.2 %)	65 (37.8 %)	62 (36.0 %)
Xc3. 自分の体の動きに満足していますか	8 (4.7 %)	33 (19.2 %)	131 (76.2 %)
精神的因子			
Xc4. 自分の精神的なゆとりに満足していますか	40 (23.3 %)	58 (33.7 %)	74 (43.0 %)
Xc5. 自分の意思決定に満足していますか	25 (14.5 %)	46 (26.7 %)	101 (58.7 %)
Xc6. 自分の信念(信条)に満足していますか	18 (10.5 %)	51 (29.7 %)	103 (59.9 %)
社会関係因子			
Xc7. 友人と付き合いに満足していますか	22 (12.8 %)	57 (33.1 %)	93 (54.1 %)
Xc8. 家族や親類の人との付き合いに満足していますか	26 (15.1 %)	64 (37.2 %)	82 (47.7 %)
Xc9. 近所・地域の人とのつながりに満足していますか	19 (11.0 %)	51 (29.7 %)	102 (59.3 %)
環境便利因子			
Xc10. 住んでいる地域の生活の便利さに満足していますか	31 (18.0 %)	76 (44.2 %)	65 (37.8 %)
Xc11. 生活するうえで必要な情報の得やすさに満足していますか	31 (18.0 %)	67 (39.0 %)	74 (43.0 %)
Xc12. 住んでいる地域の福祉サービスの内容に満足していますか	48 (27.9 %)	81 (47.1 %)	43 (25.0 %)
環境快適因子			
Xc13. 生活している地域の環境衛生に満足していますか	27 (15.7 %)	84 (48.8 %)	61 (35.5 %)
Xc14. 生活している地域の安全性に満足していますか	24 (14.0 %)	59 (34.3 %)	89 (51.7 %)
Xc15. 住んでいる地域の自然環境に満足していますか	16 (9.3 %)	61 (35.5 %)	95 (55.2 %)

単位:名 (%)

図 1 介護評価と健康関連 QOL の関係



統計解析方法として構造方程式モデリングを採用した。この統計手法は、モデルの構成力が従来の分析手法と比して非常に柔軟であり、理論的な仮説に基づき組み立てられたモデルを、実際のデータに当てはめ、複数の適合度指標によりモデルの妥当性を評価できることを特長としている（豊田秀樹，1998：朝倉書店，山本嘉一郎・小野寺孝義，1999：朝倉書店，狩野裕，1997：現代数学社）。本研究では、Lazarus らのストレス認知理論を基礎とした Lawton らの提起する Two-Factor Model を援用して因果関係モデルを構築し、その因果関係モデルのデータへの適合性を構造方程式モデリングで解析したことは、適切な判断であったと言える。

以上のことをふまえ、本研究では、要介護高齢者を介護する息子の嫁の介護に対する介護肯定感と介護否定感が QOL にどのような影響を持つかについて、潜在変数を用いた因果関係モデルを設定し、実際のデータへの適合度と各変数間の関連性を検討した。因果関係は、介護肯定感（「介護状況の満足感」）と介護否定感（「介護負担感指標」）を独立変数、QOL（「QOL 満足度指標」）を従属変数とするモデルとした。介護の肯定的側面については、「介護状況の満足感（以下、満足感）」と「自己成長感」の 2 側面が知られているが、従来の研究において、満足感が介護負担に対し軽減効果を持つ（櫻井成美，1999：203-210）ことが指摘されていたことから、本研究では、満足感の 1 因子のみを使用した。

その結果、まず第一に、高齢者を介護する息子の嫁においては、介護肯定感健康関連 QOL に対して正の相関を示しており、介護肯定感が高いほど、QOL が良好な状態であるということが示された。従来の研究では、満足感や生きがいなどの介護に対する肯定的評価が、介護継続意向や主観的ウェルビーイングといったポジティブな反応に結びつくといった報告⁽⁵⁾も認められる。本研究における結果も、その因果関係を支持するものであった。

また、第二に、介護負担感は QOL に対し、QOL を低下させる方向に機能していることが示された。この関係性については、すでにストレス理論を基礎とした研究において既知のことであり⁽⁶⁾、本研究においても、その結果を支持するものであった。

第三に、本研究では、介護肯定感介護負担感を和らげる機能があることが示された。介護肯定感を高めることで介護負担感を抑制し、かつ直接的な効果として QOL を良好に保つといった介入の有り方が示唆され、さらに多様な介入のあり方を模索し、進めていく必要性と、その有効性が推察された。従来の研究によれば、介護肯定感には、介護者と要介護高齢者の「よい関係」や健康状態が良い事が関連している⁽⁷⁾とされている。特に、配偶者介護の場合は、夫婦が長い年月をかけて培った人間関係により、介護に対して充実感を感じているという報告（翠川順子，1993：16-26）がなされていたが、本研究の結果が示したように、そのような関係が息子の嫁にも成立することは従来の研究

(5) Cohen et al., 1994: 378-391, 齊藤恵美子・國崎ちはる・金川克子, 2001: 180-189, Lawton and Moss and Kleban, 1989: 61-71, 山本則子・ほか, 2002: 660-671, 櫻井成美, 1999: 203-210, Orbell and Hopkins and Gillies, 1993: 149-163, Pinquart and Sörensen, 2003: 112-128, Pruchno, 1990: 57-71, Schulz et al., 1995: 771-791, Smith, 1996: 353-361, 右田周平・服部ユカリ, 2001: 129-137

(6) Anthony and Zarit and Gatz, 1988: 245-258, 一宮

厚・ほか, 2001: 1159-1167, Barusch, 1988: 677-685, Chenoweth and Spencer, 1986: 267-272, Donaldson and Terrier and Burns, 1997: 62-68, Potter, 1993: 447-457, Pruchno and Michaels and Potashnik, 1990: 5259-5266

(7) 岸恵美子・ほか, 1999: 11-19, 翠川順子, 1993: 16-26, 上田照子・ほか, 1994: 499-505, 藤田利治・ほか, 1992: 687-695

にはなかった知見と言えよう。今回の研究を前提に、息子の嫁の介護肯定感の得点の平均値と標準偏差を参考に判断するなら、たとえば、平均値から-1標準偏差以下の得点を示す人は介護肯定感が低く、また平均値から-2標準偏差以下の人は介護肯定感がほとんど無いと見なすことも可能であり、このような息子の嫁の場合には、健康状態を直接的・間接的に高めるための介入が重点的に提供されなければならないことが示唆される。さらに、要介護高齢者の介護者で健康状態が悪い人は、家事と介護の両立が困難な場合が多く、配食・給食サービスの希望が高いこと(岸恵美子・ほか, 1999: 11-19)が報告されている。また彼らはデイサービスやショートステイの希望も高い(安倍幸志, 2002: 12-20, 桑原祐一・ほか, 2002: 154-167)とされている。このようなことから、間接的に、前記のサービスをより集中的に提供するような環境整備が望まれよう。他方、今後は従来の介護負担感によってもたらされる介護者のQOL低下の予防を目的とした研究に加え、肯定的な評価によってもたらされるQOLの維持・向上を目的とする介護評価についての包括的な研究へと、その範囲を拡大していくことが望まれよう。そのようなアプローチは、従来の介護負担感によって介護者のQOLが低下するといった認知的評価のネガティブなイメージが、介護肯定感の増強によって介護負担感を軽減し、かつ精神的健康を高めることができるといったポジティブで、より積極的なイメージを、もたらすものと言えよう。

以上、本研究では在宅高齢者の介護者の介護評価の肯定的、否定的側面が、相互に関連しつつも相対的に独立した概念であり、QOLに対して個別に影響を与えることを明らかにした。また、介護肯定感とはQOLを高めるだけでなく、介護負担感を軽減させることが明らかとなった。これらの知見を踏まえ今後は、介護

肯定感が介護負担感やQOLに及ぼす影響を把握した上で、介護負担感の軽減と共に、介護肯定感の形成に役立つ、個々人にあった介入方法を提起していくことが望まれる。

参考文献

- 1) 김수영 「認知症老人の家族扶養者の生活の質に及ぶ影響要因」、『社会福祉政策』17、2003、77-105 ページ。
- 2) 김수영・김진선・윤현숙 「認知症老人を介護する家族扶養者の鬱と生活の満足予測要因」、『韓国老年学』24(2)、2004、111-128 ページ。
- 3) 김윤정・최혜경 「認知症老人の障害期間と扶養者の対処資源が扶養者の負担および扶養満足感に及ぶ影響」、『韓国老年学』13(2)、1993、63-83 ページ。
- 4) 마정수・김초강 「認知症老人の問題行動が家族ストレスに及ぶ影響」、『保健教育健康増進学会誌』12(1)、1995、83-110 ページ。
- 5) 문혜리 「家庭内の認知症老人看護者負担に関する調査研究」、『韓国保健看護学会誌』6(2)、1992、108-132 ページ。
- 6) 박영남・박종환・정철호・하재창・고효진 「慶北ある面地域における老人性認知症の有病率」、『神経精神医学』30(6)、1991、1121-1129 ページ。
- 7) 서국희・김장규・연병길・박수경・유근영・양병국・김용식・조맹제 「老年期認知症と鬱症の有病率および危険因子」、『神経精神医学』39(5)、2000、809-824 ページ。
- 8) 우종인・이정희・유근영・홍진표・김창엽・김용익・이강욱 「韓国のある農村地域に居住する老人の認知症有病率」、『神経精神医学』36(1)、1997、92-102 ページ。
- 9) 유광수 「老人性認知症患者を看護する家族の負担感に対する研究」、『韓国保健看護学会誌』15(1)、2001、125-147 ページ。

- 10) 윤현숙·차홍봉·조양순 「脳卒中老人扶養家族の扶養負担と鬱に及ぶ影響要因に関する研究」、『韓国老年学』20 (2)、2000、137-153 ページ。
- 11) 이강오 「認知症患者家族の生活の質と影響要因に関する研究」、『精神看護学会誌』12(1)、2003、15-26 ページ。
- 12) 이경자 「認知症老人の看護問題と介護する家族の負担感に関する研究」、『한국노년학』15 (2)、1995、30-51 ページ。
- 13) 이미진·이가옥 「長期療養保護老人家族介護者の情緒的扶養負担に関する研究」、『韓国老年学』20 (2)、2000、215-228 ページ。
- 14) 이영호·강태민·이상수·김민걸·안동성·윤성환·정청·방남희·이상경·심주철·김용관·김영훈 「在宅認知症老人の扶養負担と精神病理および扶養者の社会的サービスニーズとの関連性」、『神経精神醫學』37 (6)、1998、1292-1305 ページ。
- 15) 이은희 「認知症老人扶養家族の扶養負担感に関する研究」、『老人복지研究』1 (2)、1998、211-239 ページ。
- 16) 이은희 「農村の中年女性の姑舅扶養ストレスと精神健康に関する研究」、『老人복지研究』23、2004、231-251 ページ。
- 17) 조맹제·함봉진 「Alzheimer 病の力学」、『啓明醫大論文集』16 (3)、1997、306-322 ページ。
- 18) Anthony-Bergstone, C.R., S.H. Zarit, and M. Gatz, Symptoms of psychological distress among caregivers of dementia patient, *Psychology and Aging* 3, 1988, pp.245-258
- 19) 一宮厚、井形るり子、尾籠晃司、井形朋英、 “在宅痴呆高齢者の介護者における介護の負担感と QOL : WHO/QOL-26 による検討” *老年精神医学雑誌* 12 (10)、2001、1159-1167 ページ
- 20) Barusch, A.S., Problems and coping strategies of elderly spouse caregivers, *The Gerontologist* 28, 1988, pp.677-685
- 21) Baumgarten M., The health of persons giving care to the demented elderly: a critical review of the literature, *J Clin Epidemiol* 42 (12) , 1989, pp.1137-1148
- 22) Baumgarten M, RN. Battista, C. Infante-Rivard, JA. Hanley, R. Becker, and S. Gauthier, The psychological and physical health of family members caring for an elderly person with dementia, *J Clin Epidemiol* 45 (1) , 1992, pp.61-70
- 23) Baumgarten M, JA. Hanley, C. Infante-Rivard, RN. Battista, R. Becker, and S. Gauthier, Health of family members caring for elderly persons with dementia. A longitudinal study, *Ann Intern Med* 120 (2) , 1994, pp.126-132
- 24) Brislin, R. Back translation and cross cultural research, *J. Cross cult psycho* 1, 1970, pp.185-216
- 25) Chenoweth, B., and B. Spencer, Dementia: the experience of family caregivers, *The Gerontologist* 26, 1986, pp. 267-272
- 26) Cohen, C.A., D.P. Gold, K.I. Shulman, and C.A. Zuccherro, Positive aspects in caregiving: An overlooked variable in research, *Canadian Journal on Aging* 13, 1994, pp.378-391
- 27) Donaldson, C., N. Terrier, and A. Burns, The impact of the symptoms of dementia on caregivers, *Br Journal of Psychiatry* 170, 1997, pp.62-68
- 28) DY, Lee., Lee JH, Ju YS, Lee KU, Kim KW, Jhoo JH, Yoon JC, Ha J, and Woo JI, The prevalence of dementia in older people in an urban population of Korea: the Seoul study, *J Am Geriatr Soc* 50 (7) ,

- 2002, pp.1233-1239
- 29) 斉藤恵美子、國崎ちはる、金川克子「家族介護者の介護に対する肯定的側面と継続意向に関する検討」『日本公衆衛生雑誌』48(3)、2001、180-189 ページ
- 30) 岸恵美子、神山幸枝、土屋紀子、渡邊亮一「在宅要介護高齢者の介護者の介護継続意志に関わる要因の分析」『自治医大看護短大紀要』4、1999、11-19 ページ
- 31) Grafstrom, M., L. Fratiglioni, P.O. Sandman, B. Winblad, Health and social consequences for relatives of demented and non-demented elderly : A population-based study, *J Clin Epidemiol* 45 (8) , 1992, pp.861-870
- 32) Haley, WE., EG. Levine, SL. Brown, JW. Berry, and GH. Hughes, Psychological, social, and health consequences of caring for a relative with senile dementia, *J Am Geriatr Soc* 35 (5) , 1987, pp.405-411
- 33) 豊田秀樹『統計ライブラリー 共分散構造分析[入門編]—構造方程式モデリング—』東京：朝倉書店、1998
- 34) 井上郁 “認知障害のある高齢者とその家族介護者の現状” *看護研究* 29 (3)、1996、189-202 ページ
- 35) JI, Woo., Lee JH, Yoo KY, Kim CY, Kim YI, and Shin YS, Prevalence estimation of dementia in a rural area of Korea, *J Am Geriatr Soc* 46 (8) , 1998, pp. 983-987
- 36) Jutras, S., and JP. Lavoie, Living with an impaired elderly person: the informal caregiver's physical and mental health, *J Aging Health* 7 (1) , 1995, pp.46-73
- 37) 翠川順子「在宅障害老人の家族介護者の対処(コーピング)に関する研究」『社会老年学』37、1993、16-26 ページ
- 38) 山本嘉一郎、小野寺孝義、『Amos による共分析構造分析[入門編]—構造方程式モデリング—』東京：朝倉書店、1999
- 39) 安倍幸志「介護マスタリーの構造と精神的健康に与える影響」『健康心理学研究』15(2)、2002、12-20 ページ
- 40) 中嶋和夫、香川幸次郎、林千萬、「保健福祉関連QOL尺度の開発」『厚生指標』50(8) 2003、8-15 ページ
- 41) Lawton, M.P., M. Moss, and M.H. Kleban, Measuring caregiving appraisal, *Journal of Gerontology* 44, 1989, pp.61-71
- 42) 山本則子、石垣和子、国吉緑、河原宣子、長谷川喜代美、林邦彦、杉下知子「高齢者の家族における介護の肯定的認識と生活の質(QOL)、生きがい感および介護継続意思との関連：続柄別の検討」『日本公衆衛生雑誌』49(7)、2002、660-671 ページ
- 43) 櫻井成美「介護肯定感がもつ負担軽減効果」『心理学研究』70(3)、1999、203-210 ページ
- 44) 博野信次、小林広子、森悦朗 「痴呆症患者の介護者の負担—日本語版 Zarit Caregiver Burden Interview による検討—」『脳神経』50(6)、1998、561-567 ページ
- 45) Nygaard HA, Strain on caregivers of demented elderly people living at home, *Scand J Prim Health Care* 6 (1) ,1998, pp.33-37
- 46) Orbell, S., N. Hopkins, and B. Gillies, Measuring the impact of informal caring, *Journal of Community and Applied Social Psychology* 3, 1993, pp.149-163
- 47) Pinquart, M., and S. Sörensen, Associations of stressors and uplifts of caregiving with Caregiver burden and depressive mood: A meta-analysis, *Journal of Gerontology, Psychological Sciences* 58 (2) , 2003, pp.112-128
- 48) Potter, J.F., *Comprehensive geriatric*

- assessment in the outpatient setting: population characteristics and factors influencing outcome, *Exp Gerontologist* 28, 1993, pp.447-457
- 49) Pruchno, R.A., The effects of help patterns on the mental health of spouse caregivers, *Research on Aging* 12, 1990, pp.57-71
- 50) Pruchno, R.A., J.E.Michaels, and S.L. Potashnik, Predictors of institutionalization among Alzheimer's disease victims with caregiving spouses, *Journal of Geriatrics* 45, 1990, pp.5259-5266
- 51) Sadanori, Higashino., Tsutui Takako, Kirino Masafumi, Yajima Yuki, Kim Yong-Taek, and Nakajima Kazuo, Development of the Family Caregiver Burden Inventory (FCBI), *International Journal of Welfare for the Aged* 9, 2003, pp.1-14
- 52) Schulz, R., A.T. O'Brien, J. Bookwala, and K. Fleissner, Psychiatric and physical morbidity effects of dementia caregiving: Prevalence, correlates, and causes, *Gerontologist* 35, 1995, pp.771-79
- 53) Seung Yeun, Shin, Adaptational outcomes among Caregivers of Senile Dementia Patients: Effects of Patient Impairments, *平澤大学論文集* 9 (2), 1999, pp.195-211
- 54) Smith, G.C., Caregiving outcomes for older mothers of adults with mental retardation: A test of the Two-Factor Model of psychological well-being, *Psychology and Aging* 11 (2), 1996, pp.353-361
- 55) 右田周平、服部ユカリ「痴呆性高齢者の家族介護の肯定的側面に関する因子構造とその関連要因」『老年看護学』6 (1)、2001、129-137 ページ
- 56) 上田照子、橋本美知子、高橋祐夫、後藤博文、来嶋安子、大塩まゆみ、水無瀬文子、青木信雄、中園直樹 「在宅要介護老人を介護する高齢者の負担に関する研究」『日本公衛誌』41 (6)、1994、499-505 ページ
- 57) 藤田利治、石原伸哉、増田典子、榛澤ゆかり、森千代子、難波貴代、太田英代、萱島伸子、児玉寛子、橋本修二、母里啓子、尾崎米厚、簗輪眞澄 「要介護老人の在宅介護継続の阻害要因についてのケースコントロール研究」『日本公衛誌』39 (9)、1992、687-695 ページ
- 58) Vitaliano, PP., J. Russo, HM. Young, L. Teri, and RD. Maiuro, Predictors of burden in spouse caregivers of individuals with Alzheimer's disease, *Psychol Aging* 6 (3), 1991, pp.392-402
- 59) 桑原祐一、鷺尾昌一、荒井由美子、和泉比佐子、森満 「要介護高齢者を介護する家族の負担感とその関連要因 福岡県京築地区における介護保険制度発足前後の比較」『保健医療科学』51 (3)、2002、154-167 ページ
- 60) 狩野裕、『AMOS,EQS,LISREL によるグラフィカル多変量解析－目で見える共分散構造分析－』京都：現代数学社、1997